

かこむ

ここに『だ・ん・ら・ん』という雑誌がある。1980年代の初めのものだが、
表紙に使われている写真は、大きなテーブルを中心に、新聞を読む父親、
家計簿をつける母親、そして宿題をする子供たちのすがたと、「団欒」を絵
に描いたような光景である。その中に「リビングルームに大きなテーブルを！」
という記事があった。大きなテーブルが一つあれば、家族の集まる場所がで
き、「当然会話も多くなり、気持ちも通じ合い、したがって、家族の結びつ
きがより強くなる」というのである。「現に、今大きなテーブルがはやってい
てよく売れている、だからお宅にも是非置くべきです」と、強い調子で大き
なテーブルを紹介している。

もっとも、この雑誌の表紙にあるような光景は、以前はこの家庭でも目
にすることのできる、当たり前の光景だった。雑誌の出る少し前までは、
一般に家も狭く、大きなテーブルどころか、一人一人が独立した部屋を持つ
ことなどとても考えられなかった。毎日の生活は、居間、食堂、寝室な
どを兼ねた二、三の部屋で済ませ、そこには、そのころ食卓と呼ばれた小さ
なテーブルが置かれていた。それが仕事机としても、客を迎えるテーブルと
しても、そして、食後にはみんなの団欒の場としても活躍した。寒い冬に
は、その食卓に替わってこたつが登場し、外の寒さにもかかわらず、そ

やわ あたた 暖かさが、そこに集まる皆の気持ちまでもほのぼのと 暖め和
やかにした。この食卓やこたつが家族団らんの間として「家族の結び付き
をいっそう強く」する役割を果たし、表紙の写真にあるような光景を作り
だ
出していたのである。

せんご けいざい こうどせいちよう せいかつ すこ よゆう おう
戦後、経済の高度成長とともに、生活にも少し余裕ができてくると、欧
米の生活様式や考え方がたくさん入ってきた。同時に、日本は欧米社会
と比べ個人の自立ができていないとの反省から、子供のときから独立した
へや あた はや なん ひとり しゅうかん み ひつよう
部屋を与え、早くから何でも一人でやる習慣を身につけることが必要だと
かんが
考えられるようになった。そこで、親たちは子供の教育のために、自分た
ちは我慢してもせめて子供たちには個室を与えようとしたのである。ところ
が、その「自立した」子供たちが部屋から出てこなくなってしまったのであ
る。

こども しょくじ いがい あた じぶん へや べつべつ
子供たちは、食事のとき以外は与えられた自分の部屋で、それぞれが別々
に、パソコンゲームに夢中になり、携帯電話で友達と話し、気ままに時間を
す どうぜん きょくたん すく かぞく
過ごす。当然コミュニケーションは極端に少なくなり、家族はばらばらに。
けっか おやこ だんぜつ かていないぼうりょく お
その結果、いわゆる「親子の断絶」や「家庭内暴力」が起きることになる。
せいしょうねん はんざい ざうか
また、おそらく青少年による犯罪の増加もコミュニケーションをなくした
かてい せいかつ げんいん ひと おも
家庭での生活が原因の一つであろうと思われる。

にじゅうねんいじょうまえかきじだんらんおお
二十年以上も前に書かれた記事は、団欒のシンボルとして大きなテー
ブルを紹介するばかりではなく、食卓やこたつをなくした家庭内から、そ
れと一緒に消えてしまった大切なものを取り返す必要があるとも伝えてい
たようである。